楊貴妃

禅竹作

ワキ　方士
シテ　楊貴妃

地は　唐土
季は　秋

ワキ次第「我まだ知らぬ東雲の。〳〵。道を何くと尋ねん。

詞「是は唐玄宗皇帝に仕へ申す方士にて候。さても我君政正しくましまし中に。色を重んじ艶を専とし給ふにより。容色無双の美人を得たまふ。楊家の娘たるによつて其名を楊貴妃と号す。然れどもさる子細あつて。馬嵬が原にて失ひ申して候。余りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを尋ねて参れとの宣旨に任せ。上碧落下黄泉まで尋ね申せども。

更に魂魄のありかを知らず候。こゝにいまだ蓬莱宮に至らず候ふ程に。此度蓬莱宮にと急ぎ候。

道行「尋ね行く。幻もがなつてにても。〳〵。魂のありかは其処としも。波路を分けて行く舟の。ほのかに見えし島山の。草の仮寐の枕ゆふ。常世の国に着きにけり。〳〵。

詞「急ぎ候ふ程に。蓬莱宮に着きて候。此所にて委しく尋ねばやと存じ候。

ワキ「有りし教に随つて蓬莱宮に来て見れば。宮殿盤々として更に辺際もなく。荘厳巍々としてさながら七宝をちりばめたり。漢宮万里の粧ひ。長生驪山のありさまも。是には更になぞらふべからず。あら美しの所やな。

詞「又教の如く宮中を見れば。太真殿と額の打たれたる宮あり。まづ此所に徘徊し。事の由をもうかゞはばやと存じ候。

シテサシ「昔は驪山の春の園に。共に詠めし花の色。移れば変はるならひとて。今は蓬莱の秋の洞に。ひとり詠むる月影も。濡るゝ顔なる袂かな。あら恋しの古へやな。

ワキ「唐の天子の勅の使。方士是まで参りたり。玉妃は内にましますか。

シテ「何唐帝の使とは。何しにこゝに来れるぞと。九華の帳を押しのけて。玉の簾をかゝげつゝ。

ワキ「立ち出で給ふ御姿。

シテ「雲の鬢づら。

ワキ「花の顔ばせ。

二人「寂寞たる御眼の内に。涙を浮べさせ給へば。

地「梨花一枝。雨を帯びたる粧ひの。〳〵。太液の芙蓉の紅。未央の柳の緑も。是にはいかで優るべき。実にや六宮の粉黛の。顔色の無きも理や。〳〵。

ワキ詞「如何に申し上げ候。さても后宮世にまし〳〵し時だにも。朝政は怠り給ひぬ。況んやかくならせ給ひて後。唯ひたすらの御歎きに。今は御命も危く見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せ是まで尋ね参り。御姿を見奉る事。唯是れ君の御志。浅からざりし故と思へば。いよ〳〵御痛はしうこそ候へ。

シテ詞「実に〳〵汝が申す如く。今はかひなき身の露の。有るにもあらぬ魂のありかを。是まで尋ね給ふ事。

御情には似たれども。訪ふにつらさのまさり草。枯々ならば中々の。便の風は恨めしや。又今更の恋慕の涙。旧里を思ふ魂を消す。

ワキ「さてしも有るべき事ならねば。急ぎ帰りて奏聞せん。さりながら御形見の物を給び給へ。

シテ「是こそありし形見よとて。玉の釵とり出でゝ。方士に与へ給びければ。

ワキ「いやとよ是は世の中に。たぐひ有るべき物なれば。

いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず。契り給ひし言の葉あらば。それをしるしに申すべし。

シテ「実に〳〵是も理なり。思ひぞ出づる我も又。其初秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも。

地「天に在らば願はくは。比翼の鳥と為らん。地に在らば願はくは。連理の枝と為らんと。誓ひし言を密に伝へよや。私語なれども。今洩れ初むる涙かな。

地「されども世の中の。〳〵。流転生死のならひとて。其身は馬嵬に留まり。魂は仙宮に至りつゝ。比翼も友を恋ひ。独翅をかたしき。連理の枝朽ちて。忽ち色を変ずとも。同じ心の行くへならば。終の逢ふ瀬を。頼むぞと語り給へや。

ロンギワキ「さらばといひて出舟の。伴なひ申し帰るさと。思はゞうれしさの。猶如何ならん其心。

シテ「我は又。なに中々に三重の帯。廻り逢はんも知らぬ身に。よしさらば暫し待て。有りし夜遊をなすべし。

地「実にや驪山の宮の内。月の夜遊の羽衣の曲。

シテ「其かざしにて舞ひしとて。

地「又取りかざし。

シテ「さす袖の。

地「そよや霓裳羽衣の曲。そゞろに濡るゝ袂かな。

シテ「何事も夢幻のたはぶれや。

地「あはれ胡蝶の舞ならん。

シテクリ「夫れ過去遠々の昔を思へば。いつを衆生の始めと知らず。

地「未来永々の流転。更に生死の終りもなし。

シテサシ「然るに二十五有の内。何れか生者必滅の理に洩れん。

地「先天上の五衰より。須弥の四州のさま〴〵に。北州の千年つひに朽ちぬ。

シテ「いはんや老少不定の境。

地「歎きの中の歎きとかや。

クセ「我も其かみは。上界の諸仙たるが。往昔のちなみありて。仮に人界に生れ来て。楊家の深窓に養はれ。いまだ知る人なかりしに。君聞し召されつゝ。急ぎ召し出だし。后宮に定め置き給ひ。偕老同穴のかたらひも。縁尽きぬれば徒に。又此島にたゞ独。帰り来りて澄む水の。あはれはかなき身の露

の。たまさかに逢ひ見たり。静に語れ憂き昔。

シテ「さるにても。思ひ出づれば恨ある。

地「其文月の七日の夜。君とかはせし睦言の。比翼連理の言の葉も。枯々になる私語の。笹の一夜の契りだに。名残は思ふならひなるに。ましてや年月。馴れて程経る世の中に。さらぬ別れのなかりせば。千代も人には添ひてまし。よしそれとても遁れ得ぬ。会者定離ぞと聞く時は。逢ふこそ別れなりけ

れ。

地「羽衣の曲。（序の舞）

シテ「羽衣の曲。稀にぞ返す乙女子が。

地「袖打ち振れる心しるしや。心しるしや。

シテ「恋しき昔の物語。

地「恋しき昔の物語。尽さば月日も移り舞の。しるしの釵又賜はりて。暇申してさらばとて。勅使は都に帰りければ。

シテ「さるにても〳〵。

地「君には此世逢ひ見ん事も。蓬が島つ鳥。浮世なれども恋しや昔。はかなや別れの。常世の台に。伏し沈みてぞ留まりける。

正本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著